

令和3年度冬季テーマ展

## ちょっと昔の米作りと道具たち

あわら市郷土歴史資料館

現代の米作りは、トラクターや田植え機、コンバインなどの機械を用いて行います。しかし、昭和半ばまでは人の労力や家畜に頼った米作りが行われていました。本展は、ちょっと昔の米作りについて、実際に使われていた道具と、当時の写真からご紹介します。

### ① 田の整備

米作りは、田を耕すことから始まります。秋や春先に稲の株を掘り起こす「荒起こし」は、牛馬に犁<sup>すき</sup>を引かせたり、鍬<sup>くわ</sup>で行いました。その後、鍬などで土を細かくする「田切り<sup>たきり</sup>」をして、次に田に水を張り土を砕いて細かくし、田を均<sup>なら</sup>して平らにする「代かき<sup>しろ</sup>」を、牛馬にマンガ<sup>まくわ</sup>（馬鍬）を引かせ行います。このような人力や家畜に頼った田の整備は、耕運機が使われ始める昭和半ばまで行われていました。



代掻きと田植え（小浜市和久里・府中）大正期

福井県立若狭歴史博物館 提供

### ★田の整備 こそこそ話し★

田の整備はとても重要です。田の表面に高低差があると苗が植えにくく、水がまんべんなく行き渡ることができないので、差があっても3cmだそうですよ。



マンガ（馬鍬）

### ② 田植え

苗を育てる田を苗代<sup>なわしろ</sup>といいます。田植えをする田とは別に苗代を作る場合と、田植え用の田の一部に苗代を作ることがありました。苗代は春先に水を張った田に、じかに種籾<sup>たねもみ</sup>をまいて苗を育てます。

苗取り<sup>なえと</sup>は、市内では女性の仕事であることが多かったようです。摘み取った苗はきれいに苗の根本を揃え、藁<sup>わら</sup>でくくりました。そのあと男性が籠<sup>かご</sup>に苗を入れて本田へ運び、田植えをしている人に投げて渡しました。



苗取り（福井市武周町）

『福井市史資料編13』より転載



田植え（枠植え）（美浜町新庄）

『福井県史資料編 15 民俗』より転載



田植えの枠

田の整備を終え、苗取りが済むといよいよ田植えです。田に縦方向に縄を張って植える「縄植え」、枠を転がし目印をつけて植える「枠植え」と二種類あり、地域や田によって植え方は異なりました。

朝 6 時頃から日が暮れるまで、家族はもちろん、親戚や近所の手を借りながら手作業で苗を植えていきます。他家から人手を借りたり、他家へ貸したりすることを市内では「エイ」「エネ」と呼び、手作業で同時期に行われる田植えは、お互いに協力して助け合いながら行われました。また、市内では「ソトメ」や「ヤテド」と呼ばれる田植えのエキスパートを、この時期だけ雇うこともありました。

### ★田植え こそこそ話し★

田植え時には「コビル」「コビリ」という間食がありました。細呂木地区沢の I 家では「牡丹餅」、金津地区の S 家では塩で味付けした「笹餅（豆入り）」、山方里方地区二面の A 家では「おにぎり」と「お菓子」を食べたそうですよ。

### ③ 田の管理



田の草取り（美浜町新庄）

田植えが済んでひと段落というわけにはいきません。除草機や手で草取りをしました。1 番草、2 番草、3 番草と 6 月から 7 月の間に 2 回から 3 回に分けて草取りをしますが、腰を曲げての作業は大変な重労働でした。

稲の病気や害虫駆除には、田に石灰や石油を撒いたり、誘蛾灯<sup>ゆうがとう</sup>で殺虫するなどの対策を行いました。また、「虫送り」といって明りを灯し、虫を村から追い払う行事も行われました。時代は<sup>さかのぼ</sup>りますが、江戸時代に青ノ木村や高塚村で虫送りが行われた記録がみられます。

除草剤や殺虫剤が使われ出す昭和半ばまでは、このように人が手間暇をかけて田を管理したり、行事を挙げて田を害虫から守っていました。



除草機を押して除草する（小浜市遠敷）

掲載写真（2 点）『福井県史資料編 15 民俗』より転載

## ★田の管理 こそこそ話し★

山方里方地区二面では田の<sup>あぜ</sup>畦に誘蛾灯を置いて害虫を駆除していましたが、温泉街に近いので、街の電灯の方へ虫が集まり、害虫被害が少なかったそうですよ。

### ④ 稲刈りと脱穀

稲刈りは、品種によって異なりますが、8月下旬から11月まで行われます。家族だけでなく、近所やヤテドたちの力も借りて、朝から晩まで鎌で稲を刈り束にしていきました。昭和40年（1965）頃までは、稲刈りは手作業で行われたため、時間も労力もかかりました。

刈った稲は、田や畑の道の際に作った<sup>はさ</sup>稲架に一週間かけて乾燥させた後、脱穀をしました。脱穀は大正時代に足踏み脱穀機が現れ、さらに昭和初期から動力脱穀機へと移り変わっていきました。現代はコンバインで稲刈りと脱穀が同時にできるようになり、さらに効率化されました。



鎌で稲刈り（美浜町新庄）

『福井県史資料編 15 民俗』より転載

## ★稲架作り こそこそ話し★

稲架作りは夕方から夜にかけて行いました。3mほどの高さになるので、一人がクラカケに上って下から投げてもらった稲を稲架にかけていったそうですよ。



クラカケ

### ⑤ 米の選別と出荷

脱穀後は、唐箕（トミ）に<sup>とうみ</sup>かけ<sup>もみ</sup>糶<sup>わら</sup>と<sup>もみ</sup>藁<sup>わら</sup>クズを選び分けます。選別された糶は糶干しをして、その後、<sup>どうす</sup>土臼で糶を<sup>す</sup>摺りむき、糶殻と玄米に分ける糶摺り（<sup>うすすり</sup>臼摺）を行いました。この作業では、臼から玄米、摺りむくことができなかった糶、糶殻が混ざった状態が出てきます。そのため、再度唐箕にかけた後、糶は再び土臼へ入れ、玄米はトオシにかけて粒の大きさを揃えました。このように出荷に至るまでには様々な選別作業があり、大変苦労しました。

分けられた玄米は俵に詰められ出荷されました。昭和40年（1965）頃、山方里方地区二面では朝6時頃に米俵を荷台に載せて耕運機で牽引しながら、湯のまち駅周辺にあった農協の倉庫まで、米俵を30から50俵運びました。温泉街を早朝から運搬したため、耕運機の音が「うるさい」と言われたこともあったそうです。朝9時頃には農林省の検査員が来て米の品質検査が行われ、等級をつけていきました。



土臼による糶摺り

おさこえ民家園（旧土屋家住宅内）

戦前から籾摺りが機械化され、籾摺り機はやがて唐箕、トオシの役割も担うようになりました。現代では、脱穀後の籾をカントリーエレベーターへ搬入すれば以降の作業は全て完結し、個々の農家で機械を持つ必要のない時代となりました。



俵（福井県内）昭和40年（1965）代  
福井県立歴史博物館 提供

### ★米の選別 こそこそ話し★

展示している唐箕<sup>とうみ</sup>は、脚数が四本、選別口が正面に二つあるなど西日本で見られる特徴を有します。ちなみに東日本では、脚数が6本以上で、選別口は正面および背面にあるものが多いといわれています。伊井地区稲越のA家では、選別口から出た未熟米や砕けた米である「くず米」を鶏のエサにしたり、あられにして食べたそうですよ。

選別口（右：一番口、左：二番口）



唐箕

### ⑥ 藁仕事<sup>わら</sup>

脱穀後、副産物として大量に残る稲の茎<sup>くき</sup>は、スベ（稲の葉）を取り除いて藁にし、そこから様々な藁細工を作りました。耐久性のある藁<sup>たわら</sup>は、籾<sup>むしろ</sup>、縄<sup>こも</sup>、蓆<sup>ぞうり</sup>、テゴ、草履、草鞋<sup>わらじ</sup>などに加工でき、他にも藁の「保温性」と「柔らかさ」という特徴を利用して、炊いたご飯を保温する入れ物や、重い荷物を運搬する際に体を保護する背中当てなども作られました。それぞれの道具からは、先人の知恵が伝わってきます。

これらの藁製の道具は、農閑期の冬に納屋（小屋）や囲炉裏端などで作られました。家族に作り方を教えてもらったり、地域の人たちと団らんをしながらの藁仕事は、コミュニケーションの場でもありました。



背中当て

### 令和3年度冬季テーマ展「ちょっと昔の米作りと道具たち」

会 期：令和4年1月12日（水）～令和4年5月8日（日）

開館時間：9：30～18：00（最終入館は17：30）

休 館 日：毎週月曜日・第4木曜日（その日が祝日の場合はその翌日）、

お問合せ：電話：0776-73-5158（郷土歴史資料館直通）